歌枕のかわ～平安時代の一級河川～*

A study of rivers that expressed to Japanese poem to the class A river of the Heian era.

佐治　聖介**　小椋　悠子***　千葉　幸美****
By Masayoshi Saji, Yuko Ogura, Yukimi Chiba

The aspect to the river is various. The aspect from literature is the one. However, the example of having seen the river in such an aspect up to now is few. Then, this research requests the possibility to a new aspect by which a present river is reviewed by solving the desire to the river put in the Japanese poem and the mind to a river at that time was approached. As this research method. The UTAMAKURA expressed to the Japanese poem at the beginning has been extracted. And, the river has been extracted from among the UTAMAKURA. The river to which this UTAMAKURA had been expressed was made the class A river of the Heian era. As a result, the understood thing. When the river written in the UTAMAKURA has a specific image, it is shown that river and person's connections were especially strong. Moreover, it can be said that the river where the connection with the person is strong is an important river of the age. And, the majority are the present class A rivers in the class A river of the Heian era. Moreover, it can be said that the connection of the river and the person keeps always evolving.

1.はじめに

河川への視点は多様であり，文学からの視点もそのひとつであろう．しかし，文学との関わりで河川を見てきた例は乏しい．かつて人々は，何気ない日常生活の中で地形を把握し，自然と関わりを持ちながら河川と向き合ってきた．そうした関わりが和歌等に詠まれた河川の風情なのであろう．そこで，和歌にこめられた川への想いを解き明かすことにより，現在の河川を見直す新たな視点への可能性を求め，平安時代に設定された歌枕から当時の河川観にアプローチした．

2.歌枕について

歌枕とは，古歌（古の人がうたった歌）によみこまれた諸国の名所である．また，特定の連想をもたらす場所としての地名である．　最古の歌集である万葉集の和歌に登場する地名は，実地に即してうたわれたものが多いとされる．その土地に立ち，作者の土地に対する，あるいは土地と関連した人や歴史に対する思いをよみこんだものである．地名が歌枕として一般化するのは平安時代とされる．用法として特定の景物を結びつくもの，特定の印象を伴っているもの，掛詞として用いられているものがある．これらの用法からみていくと，特定の景物や印象とつながっている歌枕は人との関わりを読み取る上で有効な指標となるといえる．

*keyword：一級河川，歌枕，平安文学

学生会員　関東学院大学大学院，*，****共　関東学院大学
（〒231-0857　神奈川県横浜市中区塚越96）

3.歌枕の河川

（1）河川の選出

古歌によみこまれている歌枕から河川を選出する．古歌のなかでも，勅撰和歌集を中心に集めた．勅撰和歌集は，国（天皇）の命令により刊行されたものである．従って，国（天皇）が選定したものであり，その歌集におさめられていることによって国（天皇）に名所として認定されていたものであると考える．現在，一級河川は「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したものに係る河川（公共の水流及び水面をいう）で国土交通大臣が指定したもの」をいう．そのため，勅撰和歌集におさめられている歌枕の河川は，現在でいう一級河川であるといえる．さらに，平安時代までに編集された歌集をもとに，河川名が歌枕として用いられている和歌を抽出し平安時代の一級河川を選出した．平安時代に限った理由として，鎌倉時代に入ると，河川を人間が暮らしやすいように開発し始めという背景があるため，開発が行われる以前の河川が人とどのように関わってきたのかを和歌によみこまれている歌枕を指標に考えた．

（2）河川の特定

河川の比較を行うために，現在の河川名と位置を特定する．

- 現在の河川名と歌枕の河川名が一致するもの・・
  例）賀茂川・鴨川→鴨川
- 参考文献と現代地図を用いる・・
  例）野路の玉川→十禅寺川
- 現地の方に聞く・・
  例）井出の玉川→玉川（井出川）

以上の方法を用い特定し以下表－1にまとめた．

表－1　歌枕の河川一覧　　※網掛けは現在一級河川である

(Table.1 River list of UTAMAKURA)

歌枕	河川名	都道府県	歌集名	歌枕	河川名	都道府県	歌集名
衣川	衣川	岩手	拾遺集	白川	白川	京都	古今集
名取川	名取川	宮城	古今集	清滝川	清滝川	京都	千載集
阿武隈川	阿武隈川	宮城	古今集	鴨川・御手洗川	鴨川	京都	後撰集・拾遺集
最上川	最上川	山形	古今集	淀川	淀川	京都	古今集
男女川	桜川	茨城	後撰集	宇治川・八十氏川	宇治川	京都	万葉集
利根川	利根川	群馬	万葉集	有栖川	有栖川	京都	千載集
隅田川	隅田川	東京	古今集	巨椋の池	(現存しない)	京都	万葉集
多摩川	多摩川	東京	万葉集	吉野川	吉野川	奈良	万葉集
富士川	富士川	静岡	万葉集	檜隈川	高取川	奈良	万葉集
千曲川	筑摩川	長野	万葉集	初瀬川・三輪川	初瀬川	奈良	古今集・万葉集
鵜坂川	神通川	富山	万葉集	佐保川・細谷川	佐保川	奈良	万葉集
涙川	三渡川	三重	後撰集	富雄川	富雄川	奈良	拾遺集
竹川	櫛田川	三重	拾遺集	竜田川	竜田川	奈良	古今集
度会の大川	宮川	三重	万葉集	飛鳥川	飛鳥川	奈良	万葉集
御裳濯川	五十鈴川	三重	後拾遺集	広瀬川	広瀬川	奈良	万葉集
野洲川	野洲川	滋賀	万葉集	布留川	布留川	奈良	万葉集
関の藤川	藤古川	滋賀	古今集	天の川	天の川	奈良	古今集
いさや川	芹川	滋賀	万葉集	夏実川	吉野川	奈良	万葉集
野路の玉川	十禅寺川	滋賀	千載集	猿沢の池	奈良市興福寺	奈良	拾遺集
田上川	田上川	滋賀	拾遺集	菅田の池	(現存しない)	奈良	千載集
近江の海・鳰海	琵琶湖	滋賀	万葉集・千載集	堀江	大川	大阪	万葉集
息長川	天野川	滋賀	万葉集	玉川の里	玉川	大阪	後拾遺集
紙屋川	天神川	京都	古今集	水無瀬川	水無瀬川	大阪	古今集
大堰川・戸無瀬川	大堰川	京都	拾遺集	芥川	芥川	大阪	拾遺集
芹川	芹川	京都	後撰集	音無川	音無川	和歌山	拾遺集
沢田川・泉川	木津川	京都	金葉集・万葉集	紀ノ川	紀ノ川	和歌山	万葉集
井出の玉川	玉川(井出川)	京都	拾遺集	布引滝	生田川上流	兵庫	千載集
桂川・梅津川	桂川	京都	古今集・拾遺集	逢染川・染川・思川	御笠川	福岡	拾遺集
中川	今出川(現存しない)	京都	後拾遺集	玉島川	玉島川	佐賀	万葉集

(3)　歌枕の河川の分布

歌枕の河川の分布と、平安時代の街道や国府を重ね図－1に示し，これらから人と河川との関わりを考える．

街道や国府があるということは，人の往来があるということであり，人と密接した関係であるといえる．

平安時代の行政区分を考えると，律令制下の地方行政からなり，朝廷所在地周辺の畿内と七道に区分されていた．当時，区分は平安京を中心に大和国・山城国・摂津国・河内国・和泉国の五国を五畿といい，地方は東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の七つの地域に分けられていた．そして，街道は畿内から放射状にその行政地域の役所であった国府を結ぶ道であった．

街道や国府を歌枕の河川の分布と重ね合わせると，歌枕の河川が街道筋に点在していることを読み取ることが出来た．また，大半の歌枕が五畿内に集中しており，「畿」とは天皇の直轄地であるということから，河川の重要性が説明できる．また，四国や九州南部にないことは国府との関係からみることができる．これらの例外とし「衣川」をあげることが出来る．国府は所在していないが，以北は未知の世界であったとされ，街道の終点であることもあり最後の関という意味でも和歌によまれている．

平安京は天皇の所在地ということにより，政治的に中心地であった．また，文化の中心地でもあったといえる．平安京を中心に河川が舟運交通として重要なものであり，河川との応答関係が発展してきたことで情緒が生まれてきた．その結果，現在の京都周辺に和歌に詠まれた河川が多く存在するといえる．

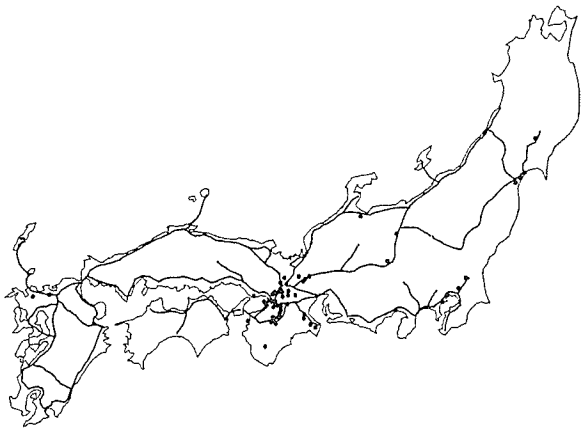
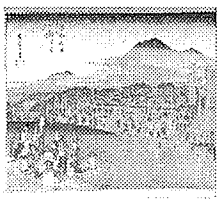


図-1　平安時代の街道や国府と歌枕の河川の分布

(Fig.1 Highway and nationalist government at the Heian era and distribution of river of UTAMAKURA)

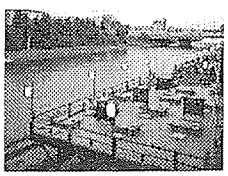
4．平安時代と現在の様子

＜鴨川（かもがわ）＞



絵－1

(Picture.1)



写真－1

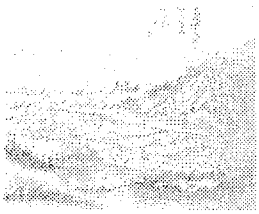
(Photo.1)

京都府京都市上賀茂神社の西を流れ，下賀茂神社の南

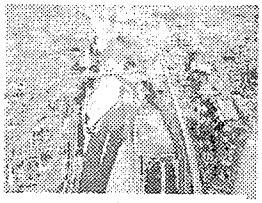
で高野川の流れを合わせ，南下して桂川と合流する．現在，一級河川淀川二次支川である．

「賀茂川のみな底澄みて照る月を行きてみんとや夏ばらへする」　と詠まれ，以後祓いや禊ぎとともによまれることが多く，加茂社との縁が強い．現在も鴨川の加茂堤は平安以降京都の三大祭のひとつである葵祭の行列の通る道となっており，上賀茂神社や下賀茂神社と深い関わりを持っている．また，鴨川納涼床は時代を通して，京の夏の風物詩である．現在も，祭りや季節行事を通して河川と人との関わりをもつようになっている．

＜千曲川（ちくまがわ）＞



絵－2
(Picture.2)



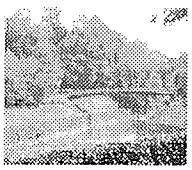
写真－2
(Photo.2)

長野県を流れる．新潟県に入り，その名を信濃川と変える一級河川である．

「信濃なる千曲の川の小石（さざれし）も君し踏みてば玉と拾（ひり）はむ」　と詠まれ「信濃の千曲川の小石でさえ，あなたが踏まれた石ならば，玉と思って拾います」という意味があり，この一帯に小石がみられた．小石が美しいロマンチックな川の象徴として古代の人々の憧れだったことから，この和歌により千曲川は憧れの地であったといえる．現在でもその憧れから多くの文学作品の題材となっている．また，「千曲川万葉公園」がありその地には２７にわたる歌碑の建立や，橋に「万葉橋」と名づけ文化の伝承を行っている．

＜竜田川（たつたがわ）＞

絵－3
(Picture.3)



写真－3
(Photo.3)

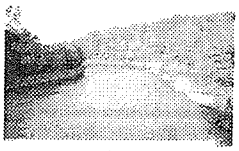
奈良県を流れる大和川の一次支流一級河川である．

「ちはやぶる神世も聞かず竜田川から紅に水くくるとは」　と在原業平に詠まれ、神々の聖域で不可思議なことがたくさん起こったといわれる大昔でも，このようなことがあったとは聞いていない．竜田川の水を美しい紅色に染めるなんて，という意味があり，紅色に染めるというところには，川岸の紅葉が美しく，川一面を覆い尽くした紅葉の下を水が潜り流れる意味があることから紅葉の名所であったことがよみとれる．以後，紅葉といえば竜田川といわれるほどに定着した．現在でも紅葉の名所であることから中世の風情を漂わせ，竜田川公園で紅葉まつりが行われている．紅葉を通して現在でも昔の様子を見ることのできる河川となっている．

＜御裳濯川（みもすそがわ）＞

三重県を流れる一級河川宮川の支川の五十鈴川であり，伊勢湾に注いでいる．

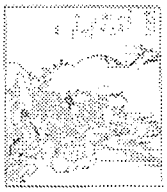
絵－4
(Picture.4)



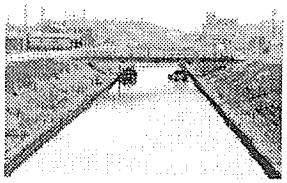
写真－4
(Photo.4)

「君が代はつきじとぞ思ふ神風や御裳濯川のすまんかぎりは」　と詠まれ，尽きることのない流れは天照大神の悠久性にたとえられた．現在も，その清流はつきることなく流れ，昔の面影を残し神秘的な雰囲気を漂わせている．

＜野路の玉川（のじのたまがわ）＞



絵－5
(Picture.5)



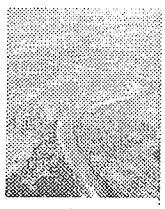
写真－5
(photo.5)

滋賀県草津市を流れる十禅寺川であり，琵琶湖に注いでいる．

「あすもこむ野路の玉川萩越えて色なる波に月やどりけり」　と川の両岸を埋める萩について詠まれている．萩の名所となり「萩の玉川」とも呼ばれた．現在は両岸コンクリート護岸となり幻想的な夜景の萩は見られない．

＜最上川（もがみがわ）＞

絵－6
(Picture.6)

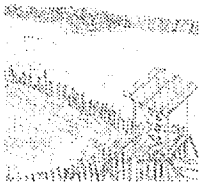


写真－6
(Photo.6)

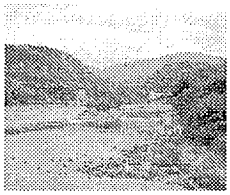
山形県を流れる一級河川である．

「最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」　より，稲舟の行き来が盛んに行われていたことがよみとれる．また，のぼればくだるという節から急流のイメージを連想させる歌となっている．現在は三大急流として，急流を生かした舟下りが観光事業として力が入れられている．また，たくさんの文化交流の舞台となったが，鉄道の普及により舟運は役割を奪われている．

＜宇治川（うじがわ）＞



絵－7
(Picture.7)



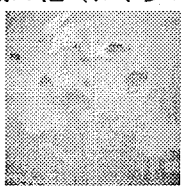
写真－7
(Photo.7)

京都府宇治市を流れる淀川水系一級河川淀川一次支川である.

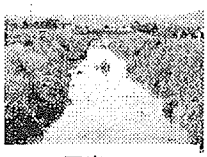
「もののふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行く方知らずも」

この歌は,近江国より都に来る時に,宇治川の辺りで作った歌であり,宇治川の流れが,網代木にふさがれてしばし漂う様を歌っている.「網代」とは,秋から冬にかけて,川中に,上流に向かってV字型に杭を打ち並べ,竹などで編んだすのこを張り,流れとともに下ってくる琵琶湖の小鮎の稚魚を取る仕掛けである.この網代は,宇治川の代表的景物といってよく,平等院鳳凰堂の扉絵にまで描かれている.このように万葉集成立時から宇治川の網代は広く知られていた.「網代木」は,網代の杭のことで,春になれば網代ははずすが,杭はそのまま残しておくため,宇治川の風物詩となっていた.平安時代には,宇治川河畔で生活していた人々の日常生活や,自然が作り出す風景は,珍しい光景として宇治を訪れる人々の目に映っていた.特に「網代見物」「鵜飼見物」は平安貴族に娯楽として楽しまれていた.現在も,夏の宇治市のイベントとして鵜飼が行なわれ,夏の風物詩として彩りを飾っている.

＜巨椋の池（おぐらのいけ）＞



絵－8
(Picture.8)



写真－8
(Photo.8)

宇治川・桂川の水を集め,木津川と合流する湖といっても良いほどの巨大な池であった.巨椋の池の広さは東西４キロ,南北３キロ,周囲１６キロとされ水深は１メートル足らずであり,蓮の花が有名であった.

「巨椋の入江とよむなり射目人の伏見が田居に雁渡るらし」とよまれたのが初出である.一大遊水地となっていたため水上交通で重要な役割を果たしていた.この時代の水運交通は淀川・巨椋の池・琵琶湖・宇治川・桂川等を結ぶものであった.現在は河川のつけかえや干拓により工場や住宅地に利用されているため現存しない.

5.まとめ

歌枕としてよまれた河川が,特定のイメージを持つとき,和歌が詠まれた当時,人と歌枕の川のつながりは,ことのほか強かった,ということを表していると言える.

また,人とのつながりの強い河川が,その時代における「重要河川」とも言い換えることが出来る.

更に,過去において,重要視された河川は現在においても重要であるか,また,現在重要視されている河川は,過去においても重要であったかについて考えると,大半の河川が,現在も一級河川として認定されており,歌枕として親しまれた河川は,現在も絶えず人とのかかわりを進化させ続けてきていると言える.しかし,歌枕の河川の多くが,現在も一級河川として認定されるが,現存しないものがあることも事実である.

人々は,河川との応答関係から文化を作りだし,今日の生活の中で息づいている.本研究は文化から,現在の一級河川は歴史的にも大事な河川として認識した.しかし一方で希薄になった関係の中で,実際にその姿をも偲ぶことが出来なくなっていることに着目すると,消えていく文化にも人々は趣を感じ,和歌の中でよみつがれ文学の中での河川観を定着させている.そのような古からの河川観を重んじる地域において,河川の重要性と各時代における河川との応答関係に深みが増していると考える.

現存に対する観点だけでなく,河川が地域の人々の中で,どのような位置を占めるかということが,時代による重要性の違いとしてみることができると考える.

6.おわりに

平安時代と現在の河川観には,時代による違いが見られる.かつて人々は,何気ない生活の中でも自然の地形を把握し,自然と関わりを持ちながら日常的に河川と向き合って応答関係を豊かにしてきた.その上に現在の生活があることを忘れてはならない.長い時代の流れの中で,人々が得てきたことは非常に多い.そして,失ってきたものも多い.河川が得たものも失ったものも,それぞれの河川の歴史であり個性なのである.その土地で河川とふれあいながら和歌をよみ,絵を描くことで,河川に対する情緒が生まれたのである.文化をつくること,守ることそれはその土地で生活を営む人にしかできないことである.かつてのものにしてしまうことなく向き合ってほしいものと考える.

近年,「多自然」,あるいは住民参加型の河川改修が各所で行われている.もっと河川と触れ合いたいという表れなのではないだろうか.河川が歩んできた歴史のなかでその土地の人が河川をどのように考えているのか,どう向き合っていきたいのかを考慮した整備計画が行われることを望む.

参考文献

1） 大岡信,『大歳時記３歌枕俳枕』,集英社,1989
2） 片桐洋一,『歌枕歌ことば辞典』,角川書店,1983
3） 久保田淳・馬場あき子,『歌ことば歌枕大辞典』,角川書店,1999
4） 『日本名所風俗図会 1～18 巻』, 角川書店,1987
5） 『名品揃物浮世絵』, ぎょうせい,1991
6） 各河川のパンフレット,国土交通省